

## 青森ねぶたを大阪万博へ！

一般財団法人 青森地域社会研究所  
前副理事長 **福士 隆三**



1867年のパリ万国博覧会。このとき日本（江戸幕府）は初めて万博に参加し、日本文化を象徴するさまざまな工芸美術品を出展する。それにより日本文化が欧米諸国の注目を浴びるようになるのだが、ことはそれだけには止まらなかった。その翌年（1868年）に発足した維新政府は、欧米主要都市で相次いで開催された万国博覧会に出展を続け、その結果、日本文化への憧れとそれを受容する動きが、フランスやイギリスを中心に盛り上がりを見せていく。いわゆるジャポニスムである。

その一方では、開国が欧米人の来訪をもたらす。欧米人たちは日本独特の文化の妙、国民の勤勉さや礼儀正しさ、さらには好奇心に満ちた心情等に触れ、日本のなかに世界でも最も文化水準の高い“非西洋”を見出すようになっていったという。

では、ジャポニスムのなかで、もっとも人気を博したのはなんであったのか。ご存知、浮世絵である。とはいえ当時の日本国内にあっては、浮世絵は俗画の域を出ず、その売買価格も二束三文でしかなかった。それに対し欧米では、その数十倍もの値段で売買されたという。そればかりか、マネ、モネ、ゴッホ、セザンヌ等の印象派の画家たちにひとかたならぬ影響を与える。

浮世絵が欧米でいかに高い評価を受け、かつ人気を博していたか、お分かりいただけよう。浮世絵師のなかでも最も高い評価を受けていたのが、富嶽三十六景や北斎漫画で知ら

れる葛飾北斎である。北斎は欧米では19世紀最高の画家として、さらにはミケランジェロやダ・ビンチにも比肩する画家として、高い評価を受けるまでに至る。だが、ジャポニスムも北斎の高い評価も、当時の日本国内ではほとんど知られていなかった。それが知られるようになったのは、ジャポニスムに関する研究が本格化した昭和の半ば以降だという。

この度、2025年の大阪万博の開催が決まった。唐突のようだが、この大阪万博に青森ねぶたを展示することを提案したい。

青森ねぶたは歴史に揉まれながら進化を遂げ、日本独特の優れた造形美を発揮するようになる。そして意外なことには、同じ日本という国にありながら、県外でこれに類する造形がほとんど見当たらないのだ。それらのことが相俟って、ねぶたは全国的な注目を浴びるようになる。日本文化を表徴する造形でありながら、同じ国の人間からこれだけの注目を浴びているのだから、これを海外からやってくる人々が目の前にしたらどうだろう。その魅力に心を奪われるであろうことは想像に難くない。

大阪万博への出展は、青森ねぶたが日本の火祭りから世界の火祭りへと飛躍するまたとない好機であるというだけではない。ねぶたの優れた造形美は、浮世絵がそうであったように、美術品としても第一級の評価を受けずにはおかない。大阪万博への出展をぜひとも実現して欲しいと思うのである。